



日本現代文學全集・講談社版 53

折口 信 夫 集

編	集	
伊	藤	整
龜	井 勝	郎
中	村 光	夫
平	野	謙
山	本 健	吉

日本現代文學全集

53

折口信夫集

編集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



昭和44年5月10日 印刷
昭和44年5月19日 發行

定價 600圓

© KODANSHA 1969

著者 ^{おり}折 ^{くち}口 ^{しの}信 ^ぶ夫

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽 2-12-21
電話東京 (942) 1111 (大代表)
郵便番號 1 1 2
振替東京 3 9 3 0

印刷 寫版製 製 背表紙クロ 口繪用紙 本文用紙 函貼用紙 見返し用紙 扉用紙	刷製 刷本 函 皮 ス 紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙	大日本印刷株式會社 株式會社 興陽社 大製作株式會社 株式會社 岡山紙器所 株式會社 第一紙鏡社 小林榮商事株式會社 日本クロス工業株式會社 日本加工製紙株式會社 本州製紙株式會社 安倍川工業株式會社 三菱製紙株式會社 神崎製紙株式會社
---	--	---

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

折口信夫集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

海やまのあひだ……………五

春のことぶれ……………三六

水の上……………六九

遠やまひこ……………八九

倭をぐな

倭をぐな……………一〇九

倭をぐな以後……………一三

砂けぶり……………一四九

古代感愛集……………一五三

近代悲傷集……………一八一

現代襤褸集……………二〇六

死者の書……………二三一

山越しの阿彌陀像の晝因……………二七四

身毒丸……………二八四

新撰山陵誌……………二九一

わが子・我が母……………二九七

歌の圓寂する時……………	三〇〇
歌の圓寂する時 續篇……………	三〇九
滅亡論以後……………	三一四
詩語としての日本語……………	三一九
詩歷一通……………	三七
左千夫の小説……………	三二
山の音を聴きながら……………	三九
——川端康成氏の近業——	
役者の一生……………	三四三

短歌本質成立の時代……………	三三三
短歌本質の成立……………	三七三
評價の反省……………	三七八
反省の文學源氏物語……………	三九五
枕草紙解説……………	三九〇
水の女……………	四〇三
作品解説……………	山本健吉 四二五
折口信夫入門……………	伊馬春部 四二一
年譜……………	四三三
参考文献……………	四四五

折口信夫集

折口信夫

ほつとする程長い白濁の先は、又目も眩ゆぬ
海が揺れてゐる。その波の青色の末が、自づ
と伸しあがり、程になつて、頭の上に擴がる
と來て居る空だ。ふり顔と、地平をくぐる
山の外縁の立ち塞つてゐる山並、その如く続
いてゐる。
回顧俯仰して目に入る物は、此だ

海やまのあひだ

大正十四年 一頁

この集を、まづ與へむと思ふ子
あるに、

かの子らや われに知られぬ妻とりて、生
きのひそけさに わびつゝをゐむ

大正十三年 一五十二頁

島山

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。こ
の山道を行きし人あり
谷々に、家居ちりばひ ひそけさよ。山の
木の間に息づく。われは

山岸に、晝を 地蟲の鳴き満ちて、このし
づけさに 身はつかれたり

山の際の空ひた曇る さびしさよ。四方の
木むらは 音たえにけり

この島に、われを見知れる人はあらず。や
すしと思ふあゆみの さびしさ

わがあとに 歩みゆるべずつゞき来る子に
もの言へば、恥ぢてこたへず

ひとりある心ゆるびに、島山のさやけきに
向きて、息つきにけり

ゆき行きて、ひそけさあまる山路かな。ひ
とりごゝろは もの言ひにけり

もの言はぬ日かさなれり。稀に言ふことば
つたなく 足らふ心

いきどほる心すべなし。手にすゑて、蟹の
はさみを もぎはなちたり

澤の道に、こゝだ逃げ散る蟹のむれ 踏み
つぶしつゝ、心むなしもよ

いまだ わが ものに寂しむさがやまず。
沖の小島にひとり遊びて

蟹の家 隣りすくなみあひむつみ、湯をた
てにけり。荒磯のうへに

ゆくりなく訪ひしわれゆゑ、山の家の難の親
鳥は、くびられにけむ

雛の子の ひろき屋庭に出であるが、夕焼
けどきを過ぎて、さびしも

蟹の村

網曳きする村を見おろす阪のうへ にぎは
しくして、さびしくありけり

磯村へますぐにさがる 山みちに、心ひも
じく 波の色を見つ

すこやかに網曳きはたらく蟹の子に、言は
むことばもなきが さぶしさ

蟹をのこ あびき張る脚すね長に、あかき
禪高く、ゆひ固めたり

あわびとる蟹のをとこの赤きへこ 目にし
む色か。浪がぐれつゝ

蟹の子のかづき苦しみ 吐ける息を、旅に
し聞けば、かそけくありけり

行きずりの旅と、われ思ふ。蟹びとの素肌

のほひ まさびしくあり

赤ふどしのまあたらしきよ。わかければ、
この蟹の子も、ものを思へり

蟹の子や あかきそびらの盛り肉^ジの、もり
膨れつゝ、舟漕ぎにけり

あぢきなく 旅やつづけむ。蟹が子の心生
きつゝはたらく 見れば

蟹をのこのふるまひ見れば さびしさよ。
脛^{ひざ}長々と 砂のうへに居り

船べりに浮きて息づく 蟹が子の青き瞳は、
われを見にけり

蟹の子のむれにまじりて経なむと思ふ は
かなごゝろを 叱り居にけり

山

若松のみどりいきるゝ山はらに、わが足お
との いともかそけさ

目のかぎり 若松山の日のさかり 遠峰^{とほみね}の
間の空のまさ青さ

田向ひに、黒檜^{くろひ}たち繁む山の崎 ゆたにな

だれて、雨あるに似たり

氣多川

きはまりて ものさびしき時すぎて、麥う
らしひとつ 鳴き出でにけり

麥うらしの聲 ひさしくなきつげり。ひと
つところの、をぐらくなれり

むぎうらしひとつ鳴き居し聲たえて、ふ
たゝびは鳴かず。山の寂けさ

ふるき人 みなから我をそむきけむ 身の
さびしさよ。むぎうらし鳴く

麥うらしは、早蟬。鳴いて、麥にみを
入れる、と言ふ考へからの名。

*

山中^{やまなか}に今日はあひたる 唯ひとりの をみ
なやつれて居たりけるかも

にぎはしく 人住みにけり。はるかなる木
むらの中ゆ 人わらふ聲

これの世は、さびしきかもよ。奥山も、ひ
とり人住む家は さねなし

氣多川のさやけき見れば、をち方のかじか

の聲は しづけかりけり

ひるがほの いまださびしきいろひかも。
朝の間と思ふ日は 照りみてり

あさ茅原^{あさやま} つばな輝く日の光り まほにし
見れば、風そよぎけり

家裏に 鳴きつゝうつる鶏の聲。茅の家壁^や
を風とほり吹く

夜

啼き倦みて 聲やめぬらし。鴉の止^{とど}へる木
は、おぼろになれり

山の霧いや明りつゝ 鴉の 唯ひと聲は、
大きかりけり

鴉棲^{あさぎ}る梢 わかれずなりにけり。山の夜霧
はあかるけれども

さ夜ふけと 風はおだやむ。麓^{ふもと}への澤のか
や原そよぎつゝ聞ゆ

山中^{やまなか}は 月のおも昏^{くろ}くなりけり。四方の
いきもの 絶えにけらしも

山深きあかとき闇や。火をすりて、片時見

えしわが立ち處かも

山住み

夕かげの明りにうかぶ土の色。ほのかに
霧は這ひにけるかも

ほのくくと 道はをぐらし。土ぼこり踏み
しづめつゝ われは來にけり

青々と 山の梢のまだ昏れず。遠きこだま
は、岩たゝくらし

はたこの土間に 餌をかふつばくらめの
聲ひそけさや。人おとはせず

をとめ一人 まびろき土間に立つならし。
くらきその聲 宿せむと言ふ

大正十二年

—三十首—

十二月二十七日

あまつ日の み冬來向ふ色さびし。わが大
君は ものを思へり

霜月の 日よりなごみの あまりにも寂け
き空の したおぼゝしも

木地屋の家

うちわたす 大茅原となりにけり。茅の葉
光る曇き風かも

鳥の聲 遙かなるかも。山腹ヤマハラの午後の日ざ
しは、旅を倦ましむ

高く來て、音なき霧のうごき見つ。木むら
にひゞく われのしはぶき

篤ツ深き山澤遠き見おろしに、轆轤ワタリ音して、
家ちひさくあり

澤なかの木地屋キヂヤの家にゆくわれの ひそけ
き歩みは 誰知らめやも

山々をわたりて、人は老いにけり。山のさ
びしさを われに聞かせつ

夏やけの苗木の杉の、あか／＼と つゞく
峰の上ゆ わがくだり來つ

山びとは、轆轤ワタリひきつゝあやします。わが
つく息の 大きと息を

誰びとに われ憚りて、もの言はむ。かそ
けき家に、山びとゝをり

澤蟹をもてあそぶ子に、錢くれて、赤きた
なそこを 我は見にけり

わらはべのひとり遊びや。日の昏るゝ澤の
たぎちに、うつゝなくあり

友なしに あそべる子かも。うち對ふ 山
も 父母も、みなもだしたり

戻るとき、よびとめて手にくれたのは、木キば、
ついであつた。木地屋でなくてはつくりさう
もない、如何にも、つゝいな、親しみのある、
童子といふ名のふさはしい人形である。

木ばつこの目鼻を見れば、けうとさよ。す
べなき時に、わが笑ひたり

山道に しばくゝたゝずむ。目にとめて見
らくさびしき木ばつこの顔

*

山峽の激しの波のほの明り われを呼ぶ人
の聲を聞けり

供養塔

数多い馬塚の中に、ま新しい馬頭観音の石塔
婆の立つてゐるのは、あはれである。又殆
ど毎に、旅死にの墓がある。中には、業病の
姿を家から隠して、死ぬるまでの旅に出た人
のなどもある。

人も 馬も 道ゆきつかれ死にけり。旅
寝かさなるほどの かそけさ

道に死ぬる馬は、佛となりけり。行きと
どまらむ旅ならなくに

邑^ツ山の松の木むらに、日はあたり ひそけ
きかもよ。旅びとの墓

ひそかなる心をもりて をはりけむ。命の
きはに、言ふこともなく

ゆきつきて 道にたふるゝ生き物のかそけ
き墓は、草つゝみたり

谷中清水町

家ごとを處女にあづけ、年深く二階に居れ
ば、もの音もなし

水桶につけたるまゝの菊のたば 夜ふかく
見れば、水あげにけり

静物

紫陽花の まだとゝのはぬうてな、花の
紫の、色立ちにけり

あぢさみの雷ほぐれず 粒だちて、うてな

の上に みち充ちにけり

風の日

さるとりの若き芽^キ生ひの、ひたぶるに な
よめくものを 刺^トたちにけり

さるとりの鬚しなやかに濡れにけり。露は
つばらに、こまやかにして

うす緑 まだやはらかに、つゝらの葉。つ
やめく赤に筋とほりたり

たえまなく 梢^ツすく風に日かげ洩り、はげ
しきものか。下草のかをり

大正十一年

— 四十五頁 —

遠州奥領家

山ぐちの櫻昏れつゝ ほの白き道の空には、
鳴く鳥も棲^キず

燈ともさぬ村を行きたり。山かげの道のあ
かりは、月あるらしも

道なかは もの音もなし。湯を立つる柴木
のけぶり にほひ充ちつゝ

山深く こもりて響く風のおと。夜の久し
さを堪へなむと思ふ

山のうへに、かそけく人は住みにけり。道
くだり来る心はなごめり

ほがらなる心の人にあひにけり。うやく
しさの 息をつきたり

山なかに、悸^キりつゝ はかなさよ。遂けむ
世知らず ひとりをもれは

山深く われは來にけり。山深き木々のと
よみは、音やみにけり

輕塵

人ごとのあわたしきさよ。閭^ツより立ちうつ
り行く ほこりさびしも

庭土に、櫻の蔭のはらゝなり。日なか さ
びしきあらしのとよみ

もの言ひの いきどほろしき隣びとの家う
ごくもよ。あらしに見れば

春のあらし 靜まる町の足の音を 心した
しく聞きにけるかも

春の夜の町音聴けば、人ごとに　むつまじ
げなるもの言ひにけり

心ひく言をきかずなりにけり。うとくし
きは、すべなきものぞ

ひとりのみ憤りけり。ほがらかに、あへば
すなはち　もの言ふ人

人の言ふことばを聞けば、山川のおもかげ
たち來ること　多くなれり

人來れば　さびしかりけり。かならず　我
をたばかるもの言ひにけり

ほがらに　心たもたむ。人みな　はかなき
ことを言ひに來にけり

かたくなにまゐるひとりを　堪へさせよ。
さびしき心　遂げむと思ふに

雪のうへ

雨のうちに、雪ふりにけり。雪のうへに
杳あどつくる我は　ひとりを

十年あまり七とせを経つ。たち難くなり
來る心の　さびしくありけり

新しき年のはじめの春駒の　をどりさびし
もよ。年さかりたり

道なかに、明りさしたる家稀に、起きても
の言ふ聲の　静けさ

町中に、鶺鴒鳴きにけり。空際ソラのあかりまさ
れるは、夜深かるらし

犬の子の鳴き寄る聲の　死にやすき生きの
をに思ふ戀ひは、さびしも

遂げがたき心なりけり。ありさりと、空し
とぞ思ふ。雪のうへは解け

軒ごもりに　秋の地蟲ツクシの聲ならで、つたは
り來るは、人聲コトくらし

うるはしき子の　遊びとよもす家のうちに、
心やすけ人となりぬらむ

直面ヒツメンに　たゞひ満ちたる暗き水。思ひ堪へ
なむ。ひとりなる心に

水の面の暗ヤミきうねりの上あかり　はるけき
人は、我を死なしめむ

水のおもの深きうねりの　ゆくりなく目を
過ぎぬらし。遠びとのかげ

闇夜の　雲のうどきの静かなる　水のおも
てを堪へて見にけり

みぎはに、芥焼く人居たりけり。静けき夜
らを　戀ひにけるかも

川みづの夜はの明りに　うかびたる木群コグマの
うれは、揺れ居るらしも

くら闇に　そよぎ親しきものゝ音、水蘆アシむ
らは、そがひなりけり

遠ぞく夜風の音や。いやさかる思ひすべな
く　雨こぼるめり

父母の庭の訓へにそむかねば、心まさびし
き二十年を経つ

川波の白くゝだくる橋柱の　あらはれ來つ
つ　人は還らめや

あかり來る橋場の水に、あかときのおわ雪
ふりて、消えにけるかも

夏になりゆく頃

春山の青葉たけつゝつやめける　日となり
ながら、晝のさびしさ

はやり吹く 竝み木の木原^{キノハラ} なきみてる蟬
よりほかの聲 たゞずけり

かの二三子に寄す

一

この日ごろ ことばけはしくなりたりけり。
さびしき心 人を叱るも

若き人の怠りくらす心はさびし。 いましめ
易きことにあらず

二

うつそみの人はさびしも。 すきのをぞ 怒
りつゝ 國は成しけるものを

土佐へ歸る人に

洋^{ヨウ}なかに おだやむ風や。 目をあきて、 親
のいまはの息の音 きけり

大正十年

— 三十四首 —

をとめの島

— 琉球 —

朝やけのあかりしづまり、 ほの暗し。 夏く

れけぶる 島の藪原

「なつぐれ」は、ゆふだちの方言。

諸づるのすがるゝ砂は けぶりたち、 洋^{ヨウ}の
朝風 島を吹き越ゆ

洋^{ヨウ}なかの島に越え来て ひそかなり。 この
島人は、知らずやあらむ

地べたから十歩二十歩、深いのになる
と、四五十歩もおりねばならぬ水汲み場
さへ、稀ではない。 降り井・穴井など、
方言では言ふ。

をとめ居て、ことばあらそふ聲すなり。 穴^{アナ}
井の底の くらき水影^{ミヅカゲ}

處女のかぐろき髪を あはれと思ふ。 穴井
の底ゆ、水汲みのぼる

島の井に 水を戴くをとめのころも。 その
襟細き胸は濡れたり

鳴く鳥の聲 いちじるくかはりたり。 沖縄
じまに、我は居りと思ふ

あまたみる山羊みな鳴きて 喧^{カマエビス}しきが、ひ
た寂しもよ。 島人の宿に

島をみな、戻りしあとの静けさや。 縁の
明りに、しりのかたつつけり

かべ茅ゆ洩れゆく煙 ひとりなる心をたも
つ。 ゆふべ久しく

壁は、茅の葺きおろしである。 内地の古
語のまゝ、えつりと言うてゐる。

目ざめつゝ聴けば、さびしも。 壁茅のさや
ぎは、いまだ夜ぶかくありけり

人の住むところは見えず。 荒濱に向きてす
われり。 剣り舟二つ

絲満^{イトマン}の家むらに來れば、人はなし。 家五つ
ありて、山羊一つなけり

絲満^{イトマン}、絲満人を、方言風の言ひ方で、か
う言ふ。 絲満の町から、一軒二軒五六
軒、出れふに來る。 寂しい磯ばた・島か
げなどに小屋がけて、時を定めて、來
ては歸る。 一年中の大方は、そこで暮し
てゐる。

夜

下伊那の奥、矢刻川の峽野^{ツナギ}に、海と言ふ在所
がある。 家三軒、皆、縣道に向いて居る。 中
に、一人の翁がある。 何時頃からか狂ひ出し
て、夜でも晝でも、河原に出でゐる。 色々の
形の石を拾うて來ては、此小名の兩境に並べ
て置く。 其の一つひとつに、知つた限りの聖
衆の姿を、觀じて居るのだと聞いた。 どれを
何佛・何大士と思ひ辨つことの出来るのは、
其翁ばかりである。

ながき夜の ねむりの後も、 なほ夜なる

月おし照れり。河原菅原

川原の楊の隈の繁みに、夜ぐゑの鳥は、
い寝あぐむらし

川原田に住みつゝ曇る月の色 稻の花香の、
よどみたるかも

かの見ゆる丘根の篤原 ひたくだりに、さ
夜風おだやむ 月夜のひゞき

をちかたに、水霧ひ照る湍のあかり 龍女
のかげ 群れつゝをどる

光る湍の 其處につどはす三世の佛 まじ
らひがたき、現身。われは

ひたぶるに月夜おし照る河原かも。立たす
は 薬師。坐るは 釋迦文尼

湍を過ぎて、湍によどめる波のおも。かそ
けき音も なくなりけり

時ありて 渦波おこる湍のおも。何おとも
なき そのめぐりはも

うづ波のみな 穿けたり。見るゝに
青蓮華のはな 咲き出づらし

水底に、うつそみの面わ 沈透き見ゆ。來
む世も、我の 寂しくあらむ

川霧にもろ枝翳したる合歡のうれ 生きて
うごめく ものあるらしも

合歡の葉の深きねむりは見えねども、うつ
そみ愛しき その香たち來も

午後

霜凍ての、ぬくもり解くる西おもては、夕
かげすでに もよほしにけり「飯田町國學院
の庭」

友よ

目ふたきて いまだは睡ねど、しづごゝろ
怒りに堪ふる思ひになり來

たはやすく 人の言をまことあるものとし
憑む。さびしき我がさが

鐵瓶の 鳴り細りゆくゝら闇の 燐火のい
ろに、念ひ凝すも

面むかへば、たゞちに信じ、ひたぶるに心
をゆるす すべなきわがさが

とまりゆく音のまどほき。目に見えぬ時計
のおもてに、ひた向ひ居り

いきどほる心おちつく すべなさや。門弟
子ひとり 今宵とめたり

もろともに 若きうれひはとひしかど、人
の悔しき年にはなりつ

大正九年

— 四十七頁 —

大阪

風吹きて 岸に飄蕩ぐ舟のうちに、魚を焼
かせて 待ちてわが居り

川風にきしく舟にあがる波。きえて
來る小き鳥 ひとつ

はやりかぜに、死ぬる人多き町に歸り、家
を日かず 久しくなりぬ

ふるさとの町を いとふと思はねば、人に
知られぬ思ひの かそけさ

ふるさととはさびしかりけり。いさかへる子
らの言も、我に似にけり

をりくゝに　しいづる我のあやまちを、笑ふことなる　家はさびしも

久しくはとまらぬ家に、つゝましく　人ごとわりて、こもる日つゞく

兄の子の遊ぶを見れば、圓くゐて　阿波のおつるの話せりけり

いわけなき我を見知りし町びとの、今はおほよそは、亡くなりけり

みぞれ

よろこびて　さびしくなれり。庭松に　雲のそゞく時うつりつゝ

國さかり　この二十年を見ざりけり。目を　見あひつゝあるは　すべなし

をぢなきわらはべにて　我がありしかば、我を愛しと言ひし人はも

つぶくゝに　かたらひ居りて飽かなくに、年深き町のとゞろき聞ゆ

若き時　旅路にありしことおほく　忘れずありけり。われも　わが友も

過ぎにし年をかたらへば、はかなさよ。牀の黄菊の　現しくもあらず

酒たしむ人になりたる友の顔　いまだわかみと　言に出でゝほめつ

宵あさく　雲あがりし闇のそら　なほ雪あると　言ひにけるかも

あはずありし時の思ひあり。夜の街　小路のあかり、大路にとゞく

雨のゝち　あかりとぼしきぬかり道に、心たゆみのしるきをおぼゆ

星満ちて　霜氣霽れたる空濶し。値ひがたき世に　あふこともあらむ

行きとほる　家竝みのほかげ明ければ、人いりこそる家　多く見ゆ

夜の町に、室の花うるわらはべの　その手かじけて、花たばね居り

道なかに　花賣れりけり。別れ来し心つゝしみに　花もとめたり

過ぐる日は、はるけきかもと　言ひしかど、人はすなはち　はるけくなりつ

山うら

御柱海道　凍てゝ眞直なり。かじけつゝ、鶏はかたまりて居る

うちわたす　大泉　小泉　山なほ見え、刈り田の面は、昏くなりたり

その山かげには、赤彦さんの生家がある。八ヶ嶺の　その山竝みに、蓼科の山の腹黄なり。霧霽れ来れば

八ヶ嶺の山うらに吸ふ朝の汁。さびしみにけり。魚のかをりを

諏訪びとは、建御名方の後といへど、心穩ひの　あしくもあらず

母

この心　悔ゆとか言はも。ひとりの　おやをかそけく　死なせたるかも

かみそりの鋭刃の動きに　おどろけど、目つぶりがたし。母を朝りつゝ

あわたゞしく　母がむくろをはふり去る心ともなし。夜はの霜ふみ

見おろせば、膿涌きにぐるさかひ川　この

里いでぬ母が世なりし

まれくは、土におちつくあわ雪の 消え
つゝ 庭のまねく濡れたり

苔つかぬ庭のすゑ石 面かわき、雨あがり
つゝ 晝の久しき

古庭と荒れゆくつぼも ほがらかに、晝の
み空ゆ 煙さがるも

町なかの煤ふる庭は、ふきの臺たちよごれ
つゝ 土からび居り

庭の木の立ち枯れ見れば、白じろと 幹に
あまりて、蟲むれとべり

二七日 近づきにけり。家深く 蔵に出で
入る土戸のひゞき

家ふえてまれにのみ来る鶯の、かれ 鳴き
居りと、兄の言ひつゝ

静けさは 常としもなし。店とほく、とほ
りて響く ぜに函の音

さびしさに馴れつゝ住めば、兄の子のとも
もす家を 旅と思ふ

はらからのかくむ火桶に唇かわき、言にあら
まれる心はたらへり

顔をみて その言しふる弟の こゝろした
しみは、我よく知れり

たまくは 出でつゝ間ある兄の留守。待
つにしもあらず 親しみて居り

若げなるおもわは、今は とゝのほり、叔
母のみことの 母さびいます

遠くより 歸りあつまるはらからに、事を
へむ日かず いくらも残らず

大正八年 一百二十七頁

霜夜

竹山に 古葉おちつくおと聞ゆ。霜夜のふ
けに、覺めつゝ居れば

わがせどに 立ち繁む竹の梢冷ゆる 天の
霜夜と 目を瞑りをり

とまり行く音と聞きつゝ さ夜ふかき時計
のおもてを 寢て仰ぎ居り

枕べのくりやの障子 あかりたり。疊をう
ちて、鼠をしかる

ひき隠のがらすにあたる風のおと 霜の白
みは、夜あけかと思ふ

くりや戸のがらすにうつる こすもすの夜
目のそよぎは、明け近からし

息ざしの 土に觸りたる外のけはひ 誰か
い寝らし。わが軒のうちに

蒜の葉

叱ることありて後

薩摩より、汝がふみ來到る。ふみの上に、涙
おとして喜ぶ。われは

蒜の葉

雪間にかゝふ蒜の葉 若ければ、我にそむ
きて行く心はも

おのづから 歩みとどまる。雪のうへに
なげく心を、汝は 知らざらむ

朝風に、粉雪けぶれるひとたひら。會津の
櫻 固くふゝめり

雪のこる會津の澤に、赤きもの 根延ふ野
檀は、かたまり咲けり

踏みわたる山高原の斑れ雪。心さびしも。
ひとりし行けり

會津嶺に ふりさけゝぶる雪おろしを見
つゝ呆れたる心とつげむ

檜の木若芽つやめく晝の道。ほとく
心くづほれ来る

屋の上は、霜ふかゝらむ。會津の山 思ひ
たへ居り。夜はの湯槽に

鹿兒島

島山のうへに ひろがる笠雲あり。日の後
の空は、底あかりして

ゑまひのほひ なほいわけなき子を見ま
く 筑紫には來つ。心たゆむな

憎みつゝ來し汝がうなじに 骨いでゝ瘦
せたる後姿見むと思へや

うなだれて、汝はあゆめり 渚の道。憎し
と思ふ心にあらず

憎みがたき心はさびし。島山の緑かげろふ
時を經につゝ

汝が心そむけるを知る。山路ゆき いきど
ほろしくして、もの言ひがたし

叱りつゝ もの言ふ夜はの牀のうちに、こ
たへせぬ子を あやぶみにけり

庭草に、やみてはふりつぐつゆの雨 心怒
りのたゆみ來にけり

わが歎す心を知れり。燈のしたに ひたう
つむきて、身じろかね汝は

虔まじしよまに 對ふ汝がうなじに、一
つゐる蚊を、わが知りて居り

ころび聲 まさしきものか。わが聲なり。
怒らじとする心は おどろく

燈のしたに、怖ちかしこまる汝が肩を 瘦
せたりと思ひ、心さびしも

からくして 面を起す 汝の頬 白くかわ
きて 胸はかりがたし

一言を言ひ疏くとせぬ汝の顔 まさに瞻り
つゝ あやぶみにけり

言に出でゝ言はゞゆゝしみ、搏動する胸を堪
へつゝ 常の言いへり

待ちがたく 心はさだまる。庭冷えて 露
くだる夜となりけるかも

さ夜深く 風吹き起れり。待ち明す 心と
もあらず。大路のうへに

額のうへに くらくそよげる城山の 梢を
見れば、夜はもなかなり

篠垣の夜深きそよぎ 道側に、立ちまどろ
める心倦みつゝ

はるけき 辻ゆ來向ふ車の燈。音なきはし
りを踏る夜はふけぬ

をちこちの家に、ま遠に うつ時計。大路
の夜の くだつを知れり

夜なかまで 家には來ずて、わが目避く汝
があるきを 思ひ苦しも

尾張ノ少昨のぼらず。年満ちて、きのふも
今日も、人續きて上る

寄物陳思

つくしの遊行嬖子になつみつゝ、旅人は
竟に還りたりけり

よき司 われは持たらぬ憶良ゆゑ、汝がゐ
やまひは、受け得ずなりたり

國遠く、我におちつゝ 汝が住みてありと
思ふ時 悔いにけるかも

かの少昨の爲に